



Title	ランナータイのラーマ物語「ホーラマーン」：その内容と特徴
Author(s)	大野, 徹
Citation	アジア太平洋論叢. 2001, 11, p. 7-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99959
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ランナータイのラーマ物語「ホーラマーン」 ＝その内容と特徴＝

大 野 徹*

はじめに

ラーマキエン以外のタイのラーマ物語としては、ランナータイの「ブロンマチャク」が有名だが、ランナー地方にはブロンマチャク以外にも、「ホーラマーン」や「ウッサー・バーロト」という地方版ラーマ物語がある。刊本はまだなく、貝葉 (Bailaan) として地方の寺院に保存されていたのが研究者の注目を浴びるようになり、タイ語に翻訳、紹介されるに至った。もともと「ホーラマーン」も「ウッサー・バーロト」も共に、タイ語ではなく、ユアン語を用い、ランナータイ文字で記されている。タイでも地方版ラーマ物語の先駆的研究者の1人であるチャトユパー・サワッディポー (Chatrayuphaa Sawasdiphoong p.36) によると、ホーラマーンの貝葉には次の4点があると言う。

- (1) チエンライ県トンマッタ寺院所蔵
- (2) ハンドーン県ターウウブトルアン寺院所蔵
- (3) ランプーン県スリーブットユン寺院所蔵
- (4) ランプーン県プラターットリブットカイ寺院所蔵

ホーラマーンとはタイのランナー地方やイーサーン地方及びラオス国内のラーマ物語等で、「ハヌマーン」を意味する呼称である。題名の通り物語の中心はラーマではなく、ハヌマーンの活躍振りに置かれているが、ラーマヤナの基本的構成要素やその配列順序等は正確に踏襲されている。以上4点の貝葉の内、ここでは(4)の内容の概要を紹介する。

* 大阪外国語大学 アジアⅡ講座

ホーラマーンの概要

1・持国天、増長天、広目天の誕生

第一劫の頃梵天のタパラメスワンが地上に降下して寿命のある人間に生れ変わった。阿僧祇経った時タタラッタ(持国天)、ウイルパハ(増長天)、ウイルーパッカ(広目天)という3人の王子が生れた。3人が16歳になった時、ラート・ソムパテイに奪われるのを心配したタパラメスワンは、ウイルパハにランカータウイーブ(ランカー)国を支配に行かせた。ウイルーパッカにはクルラッタナコーン(アンコールワット)国を支配に行かせた。そしてタタラッタにはパーランシー(ヴァーラーナシー)国を支配させた。タパラメスワンが崩御した時、大臣、将軍達はパーランシー国を支配しているタタラッタ王に権力を引継がせた。タタラッタ王の権勢は天界は四王天から星の世界に至るまで拡大した。全ての神々、鳩槃陀、薬叉、乾達婆達がやってきて踊りを踊り、饗宴を繰広げ、尽きる事がなかった。

2・パーリー、スクリーブ、ナーン・カーシーの誕生

タタラッタ王には子供が三人いた。上の二人は男児で、兄はパーリー(ヴァーリー)、弟はスクリーブ(スグリーヴァ)と言った。末っ子は女児で、カーシーラートデイダーと言った。

3・ラーパナースーン、ピペーク、インタチトの誕生

ウイルパハ王には3人の子供がいた。3人とも男児で、上から順にラーパナースーン(ラーヴァナ)、ピペーク(ヴィビーシャナ)、インタチト(インドラジット)と言った。ラーパナースーンは能力を持って生れた。二項目の超能力(アビッジャー)である。一つは神通力(イッディ、リッディ、ニャン)で、もう一つは天眼(ディッパ・チャク・ニャン)である。ピペークは賢明な道を求めた。ウイルパハ王が崩御した時、3人は父君の在世中の財を引継いでランカー国を統治した。

4・プラ・ラームとプラ・ラッカナの誕生

ウイルーパッカ王には二人の王子がいた。一人はプラ・ラーム、もう一人はプ

ラ・ラッカナである。ウイルーパッカ王が崩御した時、プラ・ラームとプラ・ラッカナとが王位を継いでクルラッタナコーンを統治した。

5・ナーン・シーダーの誕生

ナーン・スチャダーに夫のプラ・イン(インドラ)が告げた。ラーパナースーンがプラ・インに変身してそなたと情交を楽しんだ。それを聞いて激昂したインドラ妃は、下界に降下してラーパナースーンの膝の上に生れ替った。神々が天界での生を終えるには四つの理由がある。善、食べ物、怒り、寿命。ナーン・スチャダーは憤死してラーパナースーンの膝の上に生れ変った。ラーパナースーンの立場としては自分の膝の上に女兒が出現した時、婆羅門司祭全員を招集して運勢を占わせた。婆羅門司祭達は全員が、少女には徳があるが、ラーパナースーンの命に危険をもたらす恐れがある、筏に載せて流すべきだと占った。

6・ナーン・シーダー、筏で流される

占いの結果を耳にしたラーパナースーンは女兒を金の壺の中に入れてそれを筏の上に載せて流した。筏はランカー国から閻浮提へと大海を流れカッソープ行者(カッサバ・リシ)の水浴場へと漂着した。水浴場へと降りてきて金の壺を載せた筏を目撃したカッソープ行者が壺を開けてみると、中に小さな女の子がいて手で目を擦っていた。行者は慈愛の心で少女を養育した。そして少女にシー・ター(目を擦る)と命名した。後にそれはシーダーと言う形になった。行者はいろいろな果物と誓願によって手の指先から流れ出る乳とで、少女が16歳になるまで養った。インドラ神が毘首婆羯磨(ウイットスッカーム)を降下させて、行者の庵の傍にナン・シーダー用の素敵な住いを作らせた。

7・ローイエト町の貴族がナーン・シーダーを要求

ある時、森の中に入った獵師達がナーン・シーダーの姿を目撃した。彼等はその美しさを出身地である閻浮提のローイエト町の領主に報告した。領主は軍隊を率いてカッソープ行者を訪れ、ナーン・シーダーの引渡しを求めた。行者はサハットターム・タヌと言う弓を領主達に持上げさせる事にした。以前、カッソープ行者は

パーラーンシ(ヴァーラーナシー)国の領主であった。同日に生れたという理由で親しくしている友人の領主がいた。二人はタッカシラー国へ学問をしに出掛け、三ヴェーダまで学び終えて故郷へ戻った。苦と輪廻とを悟り、出家して同じ庵で修行した。同じ場所で修行する事は適切でないと考え、友人の行者に山へ移り住むよう告げた。友人の行者は死んで天界に上りインドラになった。インドラは若い青年に変身してカッソープ行者を訪れ、その破滅を予告した。彼は千人力の弓サハッターム・タヌを行者に与えた。カッソープ行者はローイエット町の領主に、その弓を持上げる事ができればナーン・シーダーを引き渡すと伝えた。弓を持上げ得るような能力の持主等いない事は明らかである。だからといって領主達は各自故郷へ引き返す事には躊躇した。何故なら他の王子が姫君を連れ去る事を恐れたのである。彼等はナーン・シーダーの宮殿の周囲四方に軍隊を駐屯させた。

8・プラ・ラームがナーン・シーダーを獲得する

プラ・ラームとプラ・ラッカナとは、父君が崩御した時、シロブ・サッタ(シラパ・シャストラナ)を学びにタッカシラー国のテイサーパーモッカの所へ出掛けた。10年後彼等は三ヴェーダを学び終えて帰国する事にした。多くの歳月を費やしてカッソープ行者の庵の側を通り掛かった時、象や馬や人間の声が聞えた。その声はナーン・シーダーを求めにやって来たローイエット町の領主達の声であった。プラ・ラームはプラ・ラッカナを見に行かせた。プラ・ラッカナは領主の従者達に事情を尋ねた後、カッソープ行者を表敬した。サハッターム・タヌ弓を目にしたプラ・ラッカナは、プラ・ラームの功德を考え、行者のもとを辞去した。プラ・ラッカナから全てを聞いたプラ・ラームは、カッソープ行者の庵を訪ね、ナーン・シーダーの宮殿のある付近を歩いた。プラ・ラームの姿を目撃したナーン・シーダーは、全身を深い感情に満たされた。心身共に自分の過去と未来の罪業に思いを馳せた。

プラ・ラームがカッソープ行者に礼拝した時、行者を破滅させる王子の到来を語った。その王子はナーン・シーダーの引渡しを行者に求めた。行者はプラ・ラームにサハッターム・タヌ弓を持上げさせた。プラ・ラームは、まるで綿弾きの棒を持上げるかのように軽々と弓を持上げた。そして弦を引くと雷鳴が鳴り響いた。

それはローイエト町の領主の従者達の目にも明白だった。だが、事実を知ると喚声
が沸起った。そして各自自分の故郷へと引揚げて行った。カッソープ行者はナ
ーン・シーダーをプラ・ラームに引渡した。プラ・ラーム、プラ・ラッカナ、ナ
ーン・シーダーの三人は、故郷向って旅立った。

9・ラーパナースーンがナーン・シーダーを誘拐する

プラ・イン(インドラ)は、ナーン・シーダーがまだナーン・スチャダーであ
った時の望みを承知しており、以前の所へ戻ってくるであろう宿命も見抜いて
いる。彼女が切望している事を手助けして実現させようと考えたプラ・インは、
一頭の弱った鹿に変身して一行三人の前を力なく首を垂れて横切った。黄金の
鹿を見掛けたナーン・シーダーは、プラ・ラームに捕えてくれるよう求めた。
プラ・ラームは、プラ・ラッカナにナーン・シーダーと一緒に待っているよう告
げて、鹿を追った。だが、鹿を捕える事はできない。プラ・ラームは疲労困憊
した。日が傾き始めた。ナーン・シーダーとプラ・ラッカナとはプラ・ラ
ームの帰りを待っているが、なかなか帰って来ない。プラ・ラッカナが後を
追う事にした。出掛ける前、彼は、ナーン・シーダーを地母神に委ねた。そ
の時、千里眼で探し求めていたラーパナースーンが、森の中に一人取残され
たナーン・シーダーの姿を目撃した。ランカーから飛来したラーパナース
ーンは、ナーン・シーダーを抱え上げようとしたが、彼女はプラ・ラッカナ
が地母神に委ねているため大地にくっついたままで抱え上げる事ができな
い。

プラ・ラッカナの姿を見掛けたプラ・ラームが、何故シーダーの保護を放
棄したのかと尋ねる。シーダーは地母神に委ねられたままだ。ラーパナ
ースーンがナーン・シーダーを抱え上げ、ランカー国へと連れ去る。金の
鹿は姿を消した。プラ・ラーム、プラ・ラッカナ兄弟がもとの場所へ戻
った時にはナーン・シーダーの姿はなかった。プラ・ラームは深い悲し
みに暮れた。

10・プラ・ラームとプラ・ラックスナとがスクリーブに出会う

プラ・ラームとプラ・ラックスナはナーン・シーダー探しの旅に出た。
疲れた二人は、一本の榕樹の下で休憩した。プラ・ラームはプラ・ラ
ックスナに飲み水を

汲みに行かせた。水は生臭い。よく見ると、それは人の涙である。水の源を何日も掛けて辿ると、スクリーブが涙を流している。喉まで覆った目やにで蟻塚そっくりだ。プラ・ラームが尋ねる。そなたは誰か？何故そこに座って泣いているのか？スクリーブが聞き返す。そなたは神か、鳩槃陀か、乾達婆か、それとも持明呪者か？プラ・ラームが答える。自分はプラ・ラーム、こちらは弟のプラ・ラックサナ。ウイルパッカ王の子供だ。プラ・ラームとプラ・ラックサナは協力してスクリーブの目やにを削り落す。その後スクリーブの体を水で洗い、清潔にする。スクリーブは立上がり、そしてプラ・ラームとプラ・ラックサナに跪いてお辞儀をし、身の上を語った。

11・水牛のトラピー

自分の名はスクリーブと言う。兄はパーリー、妹はカーシーと言う。タタラッタ王の子供達である。カーシーは兄パーリーの妃になった。兄は王の徳で以てパーランシー国を統治していた。ある時、トラピーという名前の水牛の群が現われ、多勢の人々を角で突き殺した。家の外へ働きに出る人はいなくなった。水牛達はタマリンド樹の砦に入って戦い、砦から降りてくる。丘で受け止めるが、土は崩れ落ちないので人々はそこに子供を連れてくる。人々はますます恐怖を募らせる。パーリーは武将達に命じて銅鑼をならし、告知した。もし水牛のトラピーを退治できる者がいたら、黄金1千を与える。志願者は一人もない。パーリーとスクリーブとが出て戦うべきだとナーン・カーシが言う。しかしパーリーもスクリーブも返事をしない。ナーン・カーシは当時妊娠中だったが、激怒した。そして自分が水牛を退治すると言い出した。彼女は牡象7頭分に相当する強力無双の持主だった。

12・オンコットとワラヨットの誕生

ナーン・カーシは美しい衣装で着飾って出陣した。水牛の居場所を知った彼女は、そこへ直行した。何百何千という水牛の群がナーン・カーシー目掛けて突進し、角で突いた。ナーン・カーシーは、水牛達の首や足を捕まえて投げ飛ばした。しかしその数は余りにも多い。彼女は疲労困憊した。水牛の群は一斉に彼女目掛けて角で突いてきた。両目を突かれたナーン・カーシーは、視力を失った。腰は碎

け、衣装は千切れ、全身血塗れになった。牛の群は彼女が死んだものと思い、通り過ぎて行った。人々が彼女を助けだし、都へと担ぎ込んだ。胎児が彼女の体内から流れ出た時皆が協力して出産を手助けした。母親の腰が折れていたため嬰兒も腰が曲がって生れた。人々はオンコットと名付けた。しかしナーン・カーシの体内にはもう一人胎児がいた。皆が協力して胎児を引きずり出した。その子はワラヨットと名付けられた。父親のパーリーは、二人に授乳し、育てた。しかしナーン・カーシーの世話までは手が回らなかった。彼女は声のする方へと転がっていった。村人達は慈愛の気持で彼女に食べ物を渡した。彼女の苦しみはその罪業のせいであつた。彼女は食べ物を貰い歩き、無花果の木の下を住いとしてそこで生を終えた。

13・パーリーが水牛のトラピーを退治する

ナーン・カーシーの事を知ったパーリーとスクリーブは、水牛トラピーの退治を打ち合わせた。水牛達は洞窟を出入りしている。パーリーとスクリーブが洞窟に向う。パーリーがスクリーブに洞窟の入口を監視するよう指示する。もし洞窟から濃い血が流れ出たら、それは水牛の血だ。流れ出た血が透明だったら、それは自分の血だ。自分が死んだら汝が替って国を統治せよ。彼は洞窟の中に入って行った。洞窟の中から澄んだ血が流れ出てきた。スクリーブは兄が死んだものと理解した。そして国へ引揚げ兄に替って国を統治した。水牛を殺してパーリーが外へ出て見ると、弟の姿がない。彼は激怒した。国へ帰ってみると、玉座の上に弟が座っている。パーリーはスクリーブを殺そうと襲いかかった。逃げ出したスクリーブは、プラ・ラーム、プラ・ラッカナ兄弟に出会うまでそこに座って泣いていたのであつた。スクリーブはプラ・ラームの僕となる事を誓う。

14・ホーラマーンの誕生

スクリーブがプラ・ラーム、プラ・ラッカナ兄弟に語る。父のタタラッタ王の治世に、ナンタヤクという名の羅刹がいた。ナンタヤクに指差された者は一人残らず即死するという魔の指の持主であつた。タタラッタ王は、ナンタヤクを退治できる者がいたら褒美を与えると布告した。カンタッピという女羅刹が引受ける事になった。女羅刹は三十二項の形態と幻影という超能力を用いてナンタヤクを性的に誘

惑した。彼女は魅惑的な踊りを踊ってナンタヤクを踊りに誘った。そして指で頭を差した。踊りに夢中になっていたナンタヤクも真似をして自分の脳天を指差し即座に死を迎えた。魅惑的なカンタツピの踊りを見て性欲を刺激されたタタラツタ王も、思わず射精をしてしまった。天眼でその事を知ったカンタツピは掌で精液を受止めた。包み隠すものが何もないために大地や草の上に漏れる事を恐れたカンタツピは、里芋の葉で精液を包んだ。カンタツピは、一人の盲目の女性を見掛けた。その女性はイチジクの木の下に横たわって、落下してくるイチジクの実を食べていた。カンタツピは里芋の葉に包んだ精液をその女性の口の中に注ぎ入れた。盲目のその女は妊娠し、10か月後出産した。出産後7日経って、その女性は死んだ。死の直前、彼女は嬰兒に言い残した。完熟したイチジクの実を食べよ。それを食べていれば死ぬ事はない。嬰兒は皆からホーナムマーンと呼ばれたが、後に訛ってホーラマーンと呼ばれるようになった。

ヒマラヤ山の頂上に登ったホーラマーンは、母の遺言通り赤い色をした果実を探した。赤い色をした太陽が昇ってきた。イチジクの実だと思ったホーラマーンは、日の神の車を捕えようと飛び上がった。そして熱射範囲に達した途端、日の神の車に1滴の血となってへばり付いた。ホーラマーンの母が功德をもたらした人だという事を熟考した日の神は、燃烧してしまったホーラマーンの命に甘露水を振り掛けて新しい命を与えた。ホーラマーンは以前より遥かに強力で、自分の体を望みのものに変えられる能力を身につけた。スクリープは、アンコット、ワラヨット、ホーラマーンの三人をプラ・ラームの従臣として差し出した。

15・スクリープがパーリーと戦う

プラ・ラームは全員を連れて村へ戻った。村人達が老若男女を問わずプラ・ラームの至高菩提資糧を求めてやって来る。プラ・ラームはスクリープに語る。至高菩提資糧は益々高まる。もしよその村で戦うならば、たとえ勝ってもそれは侵略の罪を犯したと見なされる。又もし負ければそれは実に恥ずべき事だ。だからスクリープが本当に余の至高菩提資糧を求める場合、パーリーがスクリープの後を追って境界を越えて来れば余の敵と見なす。その場合余がパーリーを殺しても余の罪とはならない。その後、スクリープはパーリーに戦いを挑みに出掛けた。

16・プラ・ラームが弓を変えてパーリーを殺す

スクリープがパーリーに挑戦する前、プラ・ラームは識別をするためスクリープに一枚の布を体に掛けさせた。スクリープはパーリーの国へと直行して大声で喚きパーリーを罵倒して挑戦した。怒ったパーリーが弓を手にして現われた。スクリープは戦いながらプラ・ラームがいる境界線の内側へと後退した。プラ・ラームは弓を引いてパーリーを殺した。しかしパーリーの力は強く皮膚は分厚い。何故プラ・ラームが自分を射殺すのかとパーリーが詰問する。スクリープが余の至高菩提資糧を要請した。汝がスクリープを殺そうと越境した途端、余にはスクリープを支援する義務が生じる。もし汝が命を惜しむのであれば1滴の血、一匹の蠅が嘗めて飽和するだけの僅かな血を提供するだけでよい。プラ・ラームの申し出をパーリーは拒否した。自分には士族(クシャトリア)としての誇りがある。たとえ種子が発芽する程度の僅かな血であろうと流す事には同意できない。パーリーはこうしてプラ・ラームの矢で死ぬ事を求めた。パーリーが死ぬと、プラ・ラームはその亡骸をパーランシー国に送り返し、国民達にその死を知らせ、スクリープに国を治めさせた。

17・ホーラマーンがランカーへ行く

クルラッタナコーンへと戻ったプラ・ラーム、プラ・ラッカナ兄弟は、行方不明となったナーン・シーダーの事について武将達と相談した。1週間以内にランカー国へ到達できる能力を持った人を探させた。オンコットが奏上した。ホーラマーンをお使いになったらよいでしょう。ホーラマーンを眼前に呼び出したプラ・ラームは、超能力を披露するよう求めた。ホーラマーンは平伏して奏上した。自分の言葉は太陽7個分に相当する。そう言い終ると、由乾陀山の頂と同じ高さで3周し、迂回して鉄囲山の縁を飛ぶという神通力を披露した。戻って来てプラ・ラームの面前に平伏したホーラマーンは、言った。個人には能力がある。もし殿下が質問なされば目に見える程度にはお目に掛けます。炭火は覆い隠して置けば、誰も顔を近付けて吹こうとする人はいない。赤い色がなければ一人で上に上がる道はないだろう。気に入ったプラ・ラームは、ナーン・シーダーを探しにホーラマーンをランカー島へと派遣する事にした。ナーン・シーダーに認識して貰う証拠の品とし

て自分の指環を託した。ホーラマーンは大地を力一杯蹴って空中に飛び上がった。彼が跳躍するために足を踏み締めた大地には、一頭の巨大な象が悠々と入れる位の深い穴ができた。ホーラマーンが余りにも力一杯飛び出したため、徒歩で7日間かかると見積もった距離を遥かに飛び越えてしまった。行者ターファイ(炎の眼)の庵に落下したホーラマーンは、庵の扉をノックした。行者が「ドアを叩いたのは誰か？」と詰問した途端、ホーラマーンは塵埃となり、次いで血と化した。

18・ホーラマーン、ランカーに到着

扉にくっついて一滴の血を見た行者は、この人は功德ある生き物に違いないと考えた。そこで甘露水を注いでホーラマーンを蘇らせた。ホーラマーンはターファイ行者の庵からランカー島へ行く道を尋ねた。ランカー島は既に飛び越えて来ていると行者は答えた。ランカーへの行き方を説明する前に、その夜は一泊するよう勧めた。ホーラマーンが神通力を持っている事を知った行者は、もし徒歩で歩けば1日でランカー島を通り過ぎてしまう。夜が明けてからで十分だ。早朝托鉢に出掛けるとホーラマーンに告げた。そして庵の北側の道へ行かぬよう警告した。人の痕跡がある。最高のものがあるに違いない。そう思ったホーラマーンは、庵の北側へ行った見た。蓮池がある。ホーラマーンは蓮の実を採ろうとした。一匹の蛭がその顔に吸い付いた。ホーラマーンは飛び上がろうとしたが、蛭は引き剥がす事ができない。丁度折よく戻ってきた行者が、ホーラマーンに、葉は自分の体にあると告げてくれた。ホーラマーンは考えた末、掌に唾を吐きそれで蛭を剥がす事ができた。顔にくっついて干からびた血をホーラマーンが布で拭き取る。その布を下に敷くよう行者が指示する。ホーラマーンの神通力が弱まり、7日間は飛ぶ能力を失う。その後行者は、丸めた飯を少量ホーラマーンに取らせる。これだけでは到底足りないと思ふ。行者はホーラマーンの不満を承知している。神通力を使って飯が尽きないようにする。そしてホーラマーンに語る。飯が無くなっても又増える。ホーラマーンがどんなに食っても飯が尽き果てる事はない。ホーラマーンは飯を全部口の中に頬張った。(どの猿でも食べ物頬一杯詰め込むのはそのせいである)。その後行者はランカー島への道を教えてくれた。だが飛ぶ能力を失ったホーラマーンは、舌を引張って馬を創造、それに乗ってランカ

ーまで7日間掛けて進んだ。

19・ホーラマーン、指環を渡す

ランカーに到着したホーラマーンは、全島を隅なく探したもののナーン・シーダーは見つからない。手に食べ物を入れた籠を下げてナーン・シーダーの所へ届ける王の奴隷二人の会話を耳にする。居場所を知ったホーラマーンは、庭園の中にいるナーン・シーダーに会って、プラ・ラームから託送された指環をシーダーに届ける。シーダーはホーラマーンと一緒に帰る事はできないと告げる。何故ならホーラマーンと言えども男だからだ。プラ・ラームは使節を派遣して、ナーン・シーダーを帰国させるようラーパナースーンに要求すべきだ。もしラーパナースーンが要求を受け入れない場合には戦って連れ帰るべきだとナーン・シーダーは述べる。ホーラマーンはナーン・シーダーの伝言を携えてプラ・ラームの下へ引き返す。

20・ホーラマーン、ラーパナースーンとナーン・テーウイーの髪を括り合せる

主君に命ぜられた用事を完全に果さないまま戻る事は適切でないとホーラマーンは思う。彼はランカー帝王の王宮を燃やす事を考え、王宮内に潜入する。ラーパナースーンとその妃とが熟睡している。抜き足忍び足で潜入したホーラマーンは、ラーパナースーンとその妃の髪の毛とを括り合わせる。そして妃がラーパナースーンの頭を拳骨で殴らないと結びは解けないという文言を書き残す。妃がその通り実行すると、ラーパナースーンの神通力は衰え千里眼は消失する。

21・ホーラマーン、ランカーを炎上させる

ラーパナースーンは激怒した。彼はホーラマーンの居場所を隅から隅まで搜索させた。ホーラマーンは小猿に姿を変えて王宮の頂上に姿を現わし、ラーパナースーンの部下達に捕獲させた。ホーラマーンを臼の中に入れてつき潰させる。刀剣を用いて切らせる。しかし死なない。ラーパナースーンの部下達は油に浸した布をホーラマーンの体に巻き付け点火する。ホーラマーンはラーパナースーンの王宮の上に駆け登る。火が王宮に燃え移る。ホーラマーンは海中に跳び込む。そしてプラ・ラームの下へと引揚げ、全てを報告する。

22・道を普請する

ラーパナースーンがナーン・シーダーを誘拐した事が確実となった。プラ・ラームはオンコットを派遣し、ラーパナースーンにナーン・シーダーを返還させる。ラーパナースーンが同意せず敵対する場合には、海上を渡る横断道路を造ってランカー島へ渡り、ナーン・シーダーを返還させる。プラ・ラームは四本足、二本足の全てを集合させる。道普請のため人間は勿論、蟻、白蟻、プヨ、蚊に至るまであらゆる生き物達がプラ・ラームを手助けするため志願する。但し蝙蝠や鳩、雀等は飛び去る。道普請の仕事はホーラマーンが棟梁である。彼はランカー島に至るまでの大海に杭を打ち込む。7年6か月という長い時間を掛けて完了する。

23・ハッターの誕生

海底にパツタルムという国があり、パツタルム王によって統治されていた。プラ・ラームが道普請を始めると、その轟音が海底にまで響いてきた。何事が起ったのか、パツタルム王は原因を調べに娘を浮上させた。娘は1匹の大魚に変身して海面に現われた。道を築くためホーラマーンが上がったり下がったりしながら杭を打ち込んでいる。汗や垢が滴り落ち、海水と混じり合う。娘は海水と混じり合ったその汗や垢を飲み込んだ後、海中へと姿を消す。やがて娘は妊娠し男児を出産する。娘はその子にハッターと命名する。父親のホーラマーン同様、強力な力の持主だ

24・ピベーク、主君に追放される

ランカーまで海中を埋め立てるのに7年7か月かかった。プラ・ラームはワラヨットをラーパナースーンへの使節として派遣した。ランカーまでの埋め立ては完了した。ナーン・シーダーを返還するか否か。ラーパナースーンは拒否する。彼は軍隊を編成して戦う。戦争をしなければ男の威信が廃るからだ。ラーパナースーンはピベークに運勢を占うよう命じる。ランカーにとってもラーパナースーンにとっても不吉である。怒ったラーパナースーンはピベークを追放する。ピベークは我が身をプラ・ラームに捧げ奴卑となる。喜んだプラ・ラームはピベークに占いをさせる。七日以内にプラ・ラームの身の上に危険が生じる。七日を過ぎ

れば、プラ・ラームは間違いなくランカーを征服できる。

25・プラ・ラームが監禁される

ピベークの占いを聞いた諸国の王達は、プラ・ラームの身辺警護を厳重にした。巨大な穴を掘り、プラ・ラームを中に入れた。周囲全面を板で囲った。男の料理人7人がプラ・ラームが今までに食べた事があるような食べ物や水を用意して差し上げ、プラ・ラームがこれ以上悪くならないようにした。

ホーラマーンの汗や垢が混じった水を飲み込んで娘が妊娠した事にパツタルムの国王は憤慨した。彼はプラ・ラームを蓮の茎の穴を通して地下へ拉致し、王宮の直ぐ側にある七層の鉄の檻の中に幽閉した。そして夜警を配置して厳重な警備を行なった。ピベークが占うと、プラ・ラームはまだ生存中である。ホーラマーンに指示して地下へ行かせる。大池に行ったホーラマーンは、最も大きな蓮華を探し出し、その蓮の茎を掘って茎の孔の中を通り地下へ降りた。プラ・ラームに会うためパツタルム王国へ向ったホーラマーンは、老人に変身する。彼はパツタルム王の部下二人に遭遇する。二人はプラ・ラームに飲ませるための毒液を取りに娑婆へ出かけるところだ。ホーラマーンは、プラ・ラームが何処に監禁されているのか聞き出す。途中、水汲みに出かける女二人に出会う。二人はプラ・ラームの噂を語り合っている。ホーラマーンは一匹の虱に変身して水壺の口に止まる。水壺はプラ・ラームが閉じ込められている檻へと運ばれる。鉄の檻を蹴破ってプラ・ラームを肩の上に載せたホーラマーンは、パツタルム王とバリワンとを蹴殺して、脱出する。ハッターイーが刀を持って追跡しホーラマーンと戦う。双方の力が対等で、勝敗がつかない。ついに父子である事が判明する。プラ・ラームとホーラマーンは、ハッターイーにパツタルム国を統治させる。

26・プラ・ラッカナがモッカサクに刺される

プラ・ラームとホーラマーンは、陣営へ戻る。プラ・ラッカナが出陣を志願する。ナーン・シーダーが誘拐される原因を造ったのは自分だという責任感からである。プラ・ラームがプラ・ラッカナに弓矢を授ける。一方、ラーパナースーンは弟インタチットに出陣を命じる。双方が武器を投げ合う。インタチットが投げた

槍がプラ・ラッカナの脳天に命中する。インタチットはプラ・ラッカナの弓で射られて死ぬ。ホーラマーンがカンタマータナ山へと飛んで山頂から薬草を持ち帰る。その後彼は一匹の蟻に変身してラーパナースーンの頭を支える枕を持って来る。プラ・ラッカナの足から槍が抜け落ち、弾け飛ぶ。その薬は、今でも「ドイ・チャッデン」(弾け飛ぶ山)と呼ばれている。

27・ラーパナースーン、倒れる

その後、プラ・ラームとラーパナースーンとが決闘をした。ラーパナースーンは体を由乾陀山と同じ高さに変身した。その両眼はまるで太陽が二つ昇っているかのように見えた。ホーラマーンがプラ・ラームを自分の肩の上に載せた。ラーパナースーンが矢を射るがその矢は地上に落下してバナナに変わった。プラ・ラームが放った矢はラーパナースーンの頭に命中しその頭を切断した。ところが代りの頭が新たに生えて来る。二人の決闘を参観していた神々や鳩槃陀、乾達婆、薬叉、龍、迦楼羅等は、プラ・ラームの勝利を祈願した。何故ならラーパナースーンは二度も罪悪を犯したからである。一度目はプラ・イン(インドラ)の妃ナーン・スチャダーを騙して同衾した事、二度目はナーン・シーダーを誘拐した事である。

両者間の戦闘は勝敗がつかない。双方が軍を撤退させた。ラーパナースーンの命を絶つにはどうしたらよいのかプラ・ラームがピペークに尋ねる。ピペークによると、ラーパナースーンはトッボンクワーンチラという矢を使わない限り死なない。その矢は鉄圀山の沿海の海底にあり、一匹の夜叉が絶えず監視している。その夜叉は口を大きく開けて風で吹き寄せられる者を吸い寄せて食らっている。1由旬も遠方にいる象や犀や獅子でさえその口の中に吸い寄せられる。魚を食う時には、水上で口を開けておくと、百由旬遠方にいる魚でさえ口の中に吸い込まれると言う。ホーラマーンは体を赤いクラゲに変身して怪物の口の中に入り込み、体の内部を切り刻んで出てきた。彼は夜叉の喉を手で締め上げた。苦痛に耐えきれず、夜叉は到頭トッボンクワーンチラ矢をホーラマーンに引き渡す事に同意した。ホーラマーンがその矢を水中から引揚げると、矢が置かれていた所に海水が流れ込み、海面が半分にまで下がった。プラ・ラームがピペークに尋ねる。矢は入手できたのかどうか。ピペークが答える。もし水面が半分にまで下がっているようであれ

ば、矢は入手された事になる。プラ・ラームは海面の様子を見に行かせる。やがてホーラマーンが戻ってきてトッポクワンチラ矢をプラ・ラームに献上する。

1週間後、プラ・ラームは軍を率いてラーパナースーンと戦う。ラーパナースーンは体を乾陀山と同じ高さに変身する。プラ・ラームはホーラマーンの肩の上に載って戦う。プラ・ラームがトッポクワンチラ矢を射る。ラーパナースーンは絶命する。プラ・ラームはラーパナースーンに代ってピバークにランカー国を治めさせる。その後ナーン・シーダーを伴って故郷へ帰る。クルラッタナコーンに帰り着くと、勝利の宴を7か月7日間催す。

28・ラウオー町を築造する

29・プラ・ラームがアヨーティヤー町を築造

30・シーターが像を描く

ある日、プラ・ラーム殿下がアヨーティヤー市の周辺にある寺へ布施に出かけた。神通力を有し、強大な権勢を持ち、大変な美男子であったというラーパナースーンの姿を侍女達が見たがった。そこでナーン・シーダーに像を描いて見せてくれるよう要請した。ナーン・シーダーは侍女達に見せるため石盤にラーパナースーンの肖像を描いた。その時、プラ・ラームが布施から帰ってきた。肖像を消す暇すらなかったナーン・シーダーは、それをプラ・ラームの玉座の下に隠した。プラ・ラームが玉座に座ると、ラーパナースーンの肖像が口を利いた。「我々は互いに国王同志だ。何故に他人の頭の上に座るのか」。玉座の下を覗いたプラ・ラームが取り出して見ると、それはラーパナースーンの肖像だった。プラ・ラームは侍女達に尋ねた。描いたのは誰だ？描いたのはナーン・シーダーですと侍女達が答える。ナーン・シーダーは余よりも恋人の方を愛していたのだ。そう怒鳴ったプラ・ラームはナーン・シーダーの処刑を命じた。

31・シーターが追放される

その時、ナーン・シーダーは身籠もっていた。彼女がそれまでに積んできた功德

と胎児の威徳によって、プラ・ラッカナがプラ・ラームに言上した。処刑は私の手で執行させて欲しい。彼はナーン・シーダーを遺体が置き去りにされている墓地へと連れて行き、輪廻について話した。そして、ナーン・シーダーに逃亡しなさい。人に見つからないように身を隠して暮しなさいと告げた。その時、インドラ神が降下してきて一匹の犬の死骸を創造した。プラ・ラッカナは刀で犬の死骸を斬り、血で塗れた刀をシーター処刑の証拠としてプラ・ラームに見せた。

32・プラ・ブットとプラ・ティエムクンの誕生

ナーン・シーダーは森の中を何日も何日もあてもなく歩いた。そしてティッパチャック（千里眼）行者に出会い、その庵に滞在した。やがて男児が生まれた。プラ・ブットと命名した。聡明で、知恵才覚に優れ、武勇に恵まれるだろう。学問を学び益々雄々しい男子に成長するだろうと行者は述べた。

ナーン・シーダーは毎日木の実を探しに森の中へ入った。彼女が森へ入っていた時、夕方になってもプラ・ブットが戻って来ない。子供の姿が見えなければ戻ってきたナーン・シーダーが心配して悲しむだろう。そう思った行者は、扉の板にプラ・ブットの肖像を描いて、プラ・ブットになるよう呪文を唱えた。ナーン・シーダーは、プラ・ブットと一緒に帰って来た。行者は創造したプラ・ブットの像を布で消そうとした。それを見たナーン・シーダーが、プラ・ブットには遊び友達が必要だと言って行者に呪文を唱えさせた。その子はプラ・ティエムキンと名付けられた。プラ・ブットとプラ・ティエムキンとはそっくりで、ナーン・シーダーでさえ区別する事ができなかった程である。しかし行者はどちらが誰なのか記憶していた。二人が成長すると、ナーン・シーダーが自分の過去を子供達に語って聞かせた。

33・プラ・ブットとプラ・ティエムキンがホーラマーンを制圧する

プラ・ブット、プラ・ティエムキン兄弟は弓矢を携えて連日外出した。アヨーティヤーへ行った時、瓜売りの老婆に出会った。老婆は、ホーラマーンという一匹の猿がいる。私の瓜を取上げて食うので大嫌いだと語った。兄弟二人はその老婆を助ける事にした。ホーラマーンの手下達が徴税にやって来た。プラ・ブットとプラ・ティエムキンは、2日間税金を払うのを断るよう老婆に告げた。3日目になる

と、ホーラマーン自身がやってきた。プラ・ブットとプラ・ティエムキンの姿を見たホーラマーンは、別に問題はない。相手は子供だと、早速老婆の瓜をひつつかんで食い始めた。プラ・ブットがホーラマーンの頭を殴った。頭が割れて血が流れた。驚いたホーラマーンは、アヨーティヤーの北から東へと走り回った。全土が大騒ぎとなった。兄弟二人は都から逃げ出した。

34・プラ・ブットとプラ・ティエムキンがプラ・ラームと戦う

事件を知ったプラ・ラームは弓矢を掴んで少年二人の後を追った。少年達の姿が見えたと、プラ・ラームは百本から千本に及ぶ矢を射た。しかし1本も命中しない。プラ・ブットが、もし相手が自分の父親でなければ矢が命中して死ぬように。又もし相手が自分の父親であったならば、矢が体の回りを1周して自分の手元へ戻ってくるようにと発誓して矢を射た。矢はプラ・ラームの体の回りを1周してプラ・ブットの手元へ戻ってきた。プラ・ブットは相手が実父である事を知った。王子二人を連れて都へ帰ったプラ・ラームは、灌水供養をして国土の半分を治めさせた。

35・プラ・ラームとナーン・シーダーとの2度目の灌水供養

一方、子供が帰って来ないため、ナーン・シーダーは心配で涙を流した。王子達二人は沢山の部下を持つ身分になる。そしてまもなく庵に戻ってくるとティッパチャック行者が告げた。ナーン・シーダーは喜んだ。

プラ・ブットとプラ・ティエムキンは、母親ナン・シーダーの事をプラ・ラームに語った。プラ・ラームは軍隊を率い、ナーン・シーダーに都へ帰って貰うためティッパチャック行者の庵へ出かけた。子供二人の姿を見たナーン・シーダーは、涙を流し、喜びの余り失神した。正気に戻ったナン・シーダーはプラ・ラームの姿を見て更に涙を流した。プラ・ラーム、プラ・ラッカナそして王子二人は、行者に礼拝した。プラ・ラームはナーン・シーダーにアヨーティヤーの都へ帰るよう要請した。都へ帰り着くと、ナーン・シーダーに灌水供養を受けさせて正妃とした。又、プラ・ブット、プラ・ティエムキンの二人にも灌水供養をさせてアヨーティヤーの富を享受させた。都では7か月7日間に渡って饗宴が催された。王子二人が王位

を継いだ。プラ・ラームの正妃ナーン・シーダーは、寿命を全うしてこの世を去り、プラ・インドラの妃に戻った。

まとめ

「ホーラマーン」物語は、その内容、特徴、話の組み立て方、エピソードの順序、登場人物の名前等から見て、ラオスのラーマ物語『グヴァイ・ドヴォラビー』（水牛のトーラビー）と同工異曲である事が判る。「ホーラマーン」物語の特徴を列挙すると、次のようになる。

(1) ラーパナースン(ラーヴァナ)は、頭を1個しか持っていない。十頭の持主でないという点では、ラオスの『グヴァイ・ドヴォラビー』や『プラ・ラク・プラ・ラム』（ヴィエンチャン版）、北タイの『プロンマチャク』等と共通する。頭1個の持主という特徴は、ジャイナ教のラーマーヤナとの繋がりを窺わせる。

(2) 「ホーラマーン」物語では、ヴァーリーもスグリーヴァも、猿ではなく人間として生れている。両兄弟が父に呪われて猿に化身する経緯は、ラオスの『プラ・ラク・プラ・ラム』（ワット・カンタ寺版）やタイの『ラーマキエン』、東北タイの『ラーマ・ジャータカ』等と共通する。

(3) 「ホーラマーン」物語の最大の特徴は、ラーマ、ラーヴァナ、スグリーヴァという物語の主要登場人物が互いに従兄弟同志だという点にある。即ち3人の父親ダタラタ、ヴィルラカ、ヴィルパカは兄弟同士であり、祖父タパラメンスンの子供として生れている。この点でも、「ホーラマーン」は『グヴァイ・ドヴォラビー』と共通している。

(4) 「ホーラマーン」物語では、シーターの前身はインドラの妃で、インドラに変身したラーパナースン(ラーヴァナ)に凌辱された事から人間に生れ変って復讐するため地上に降下する。このエピソードも、ラオス版ラーマ物語と共通する。インドラの妃はラーパナースンの娘として生れ変った事から、不吉だと占われ捨て子にされる。この捨て子モチーフも、ラオス、タイ版ラーマ物語、ジャワのスラット・カンダ、マラヤのヒカヤット・スリ・ラム等と共通する。捨て子モチーフは、ジャイナ教ラーマーヤナやベンガル語版ラーマーヤナから得られた可能性が考えられる。

(5) シーターという名前の語源について、「ホーラマーン」物語では彼女が行者に発

見された時に眠そうに目(ター)を擦っていた(シー)からだとする。この説明も『グヴァイ・ドヴォラビー』と共通している。

(6)「ホーラマーン」物語には、『プロンマチャク』や『グヴァイ・ドヴォラビー』、『ブラ・ラク・プラ・ラム』等と同様、パラシュ・ラーマが登場しない。

(7)「ホーラマーン」物語には、ダシャラタ王によって誤って射殺される若い行者のエピソード(「サーマ・ジャータカ」)が組み込まれていない。

(8)「ホーラマーン」物語では、『プロンマチャク』同様、シュールパナカー(『ラーマキエン』のspanナカー)が登場しない。

(9)「ホーラマーン」物語では、黄金の鹿に変身するのはマリーチャではなくインドラである。この点では、『グヴァイ・ドヴォラビー』と同じである。黄金の鹿に変身するのは、『プロンマチャク』やマラヤの『チェリタ・マハラジャ・ワナ』等では、ラーヴァナ自身になっている。

(10)ラーマの応援に向う前、ラクシュマナは、シーターの身の安全のため彼女の身の回りに呪圈を描く。呪圈モチーフは、『ブラ・ラク・プラ・ラム』(ワット・カンタ版)や『スラット・カンダ』、マラヤの『ヒカヤット・マハラジャ・ラヴァナ』、『チェリタ・マハラジャ・ワナ』、ビルマ語版ラーマ物語(『ヤーマ・ウットウ』『ヤーマ・タージン』『アラウン・ヤーマ・タージン』等)に共通して見られる。

(11)指差された者は全て即死するという魔法の指の持主ナンタヤクのエピソードは、『グヴァイ・ドヴォラビー』『ラーマ・ジャータカ』『ラーマキエン』等と共通する。ナンタヤクは、ラーマキエンのノントク(ナンダカ)に相当する。

(12)ホーラマーンの父親はタッタラタ(ダシャラタ)である。タッタラタの精液がナン・カーシの口の中に注ぎ込まれ、その結果ホーラマーンが誕生する。タッタラタはパーリー、スクリープの父親であるから、ヴァーリー、スグリーヴァとハヌマーンとは実の兄弟という事になる。この関係は、『グヴァイ・ドヴォラビー』や『ブラ・ラク・プラ・ラム』(ワット・カンタ版)と同じ設定になる。『ラーマ・ジャータカ』では、ハヌマーンをナン・ペンシーの子供だとする。ナン・ペンシーは、パーリー、スクリープの姉だから、ハヌマーンとヴァーリー、スグリーヴァとは、叔父-甥の間柄になる。

(13)ランカー島へ向う途中、ホーラマーンは行者ターファイに出会い、一瞬の内

に血痕と化す。行者ターファイのエピソードは、『グヴァイ・ドヴォラビー』『ラーマ・ジャータカ』『ラーマキエン』『ヒカヤット・スリ・ラム』等と共通する。

(14) プラ・ラムがパツタルムによって地底に誘拐される話は、『プロンマチャク』『グヴァイ・ドヴォラビー』『プラ・ラク・プラ・ラム』『ラーマキエン』『ヒカヤット・スリ・ラム』等にも見られるが、インドでは、アナンダ・ラーマヤナを始め、ベンガル語版、オリヤ語版、アッサム語版、タミール語版、カンナダ語版、マラヤラム語版等で広く知られている。

(15) 「ホーラマーン」物語では、シーターの火の神判は取扱われない。火の神判モチーフが扱われない点では、『プロンマチャク』『グヴァイ・ドヴォラビー』『ラーマ・ジャータカ』『プラ・ラク・プラ・ラム』等と共通する。

(16) シーターがラーバナスーンの肖像を描き、立腹したプラ・ラムに処刑を命ぜられるエピソードは、『ラーマ・ジャータカ』、ジャワの『スラット・カンダ』、『ヒカヤット・スリ・ラム』、カンボジアの『リアムケー』『ラーマキエン』等、東南アジアのラーマ物語では広く知られている。

(17) 森の中でシーターが一児を出産、後に行者が一児を創造するエピソードも、『プロンマチャク』『グヴァイ・ドヴォラビー』『ラーマ・ジャータカ』『プラ・ラク・プラ・ラム』『ヒカヤット・スリ・ラム』『ラーマキエン』等、東南アジアのラーマ物語に共通する。

ホーラマーンは、プロンマチャクやウッサ・バーロットと同じように北タイに伝わるラーマ物語である。ホーラマーンには、ヴァールミーキのラーマヤナには見られない特殊なエピソードが沢山含まれているが、構成と特徴とから言えば、ホーラマーンはプロンマチャクやラオスの『グヴァイ・ドヴォラビー』等と酷似しており、共通の源から派生したか、或いはどちらか一方がどちらかの影響を受けて成立した可能性を窺わせる。今日では現存しない幻の「アユタヤー・ラーマヤナ」が「ホーラマーン」とどのような関わりを持っているのか興味を惹かれる。

使用文献

- Chatrayuphaa Sawasdiiphong : Kaan Soeksaa Priap Raamakierti Chabap Lannaa lae Chabap Phaaktai. 2522.
- Phra Ariyanuwat Khemcarithera : Phra Lak Phra Lam, Ramakian Samnuan Kao Khong Isan. 1975.
- Singha Wannasai : Chadok nok Nibat Roeang Phrommachak. 1979.
- Prakhong Krasaechai : Wannakham Lanna Thai Roeang Phrommacak. Silpakorn Univ.1981.
- Premserii : Ramakierti. Khrumthep 2537.
- Bikul Thongnoi : Rama Kirti. Bangkok
- Swami Satyananda Puri and Charoen Sarahiran : The Ramakirti(Ramakien) or the Thai version of the Ramayana. Bangkok 1949.
- Ray A. Olsson : The Ramakien, a prose translation of the Thai Ramayana. Bangkok 1968.
- Christian Velder : Der Kampf der Gotter und Damonen. Stuttgart-Fellbach 1962.
- Christian Velder : Notes on the Saga of Rama in Thailand. JSS 56 1968.
- Prince Dhani : The Rama Jataka. a Lao version of the story of Rama. JSS 36 1946 1-22.
- Dhani Nivat : The Ramakien, a Siamese version of the story of Rama. BRSFAP i 1960
- Srisurang Poolthupya : The Indian Influence on Thai culture in the Thai Ramayana. Thammasat University Bangkok 1979.
- Vo Thu Tinh : Phra Lak Phra Lam, version lao du Ramayana indien. Vientiane 1972.
- Sachchidanand Sahai : Ramayana in Laos. a study in the Gvay Dvorahbi. Delhi 1976.
- Sachchidanand Sahai : The Phra Lak Phra Lam or the Phra Lam Sadok. a Lao version of the story of Rama. New Delhi 1973.
- Sachchidanand Sahai : The Rama Jataka in Laos, a Study in the Phra Lak Phra Lam. vol.I,II Delhi 1996.
- Henry Deydier : les origines et la naissance du Ravana dans le Ramayana laotien.
- Shellabear, W.G : Hikayat Seri Rama. JRAS 71 1915 1-285.
- Shellabear, W.G : Hikayat Sri Rama, Introduction to the text of the M.S. in the Bodleian Library at Oxford. JSBRAS 70 1917.
- Overback : Hikayat Maharaja Ravana. JMBRAS 11 1933 111-132.
- Maxwell, W.E : Sri Rama a Malay fairy tale, founded on the Ramayana. JSBRAS 17 1886.
- Winstedt, R. O : Hikayat Seri Rama. JSBRAS 55 1909.
- Alexander Ziesenis : The Rama Saga in Malaysia. Singapore 1963.
- Amin Sweeney : The Ramayana and the Malay Shadow-play. Kuala Lumpur 1972.
- Singaravelu, S : A Comparative Study of the Sanskrit, Tamil, Thai and Malay versions of the story of Rama. JSS 1968 132-185.
- Singaravelu, S : The Rama Story in the Malay Tradition. JMBRAS 54-ii 1981 131-147.
- Singaravelu, S : The Episode of Maiyarab in the Thai Ramakien and its possible relationship to Tamil Folklore. JSS 74 1986.
- Santosh N. Desai : Hinduism in Thai Life. Bombay 1980.
- Bulcke, Camille : Ramakatha. Allahabad 1971.
- Smith, W.L : Ramayana Traditions in Eastern India, Assam, Bengal, Orissa. Univ. of Stockholm 1995.